

エセル・スマイス著『エセル・スマイス自伝集』第一部 (1858-77) より「音楽の胎動」抜粋

山 本 妙 訳

(前略)¹

この間ずっと、家にいる時も学校にいる時も、私の人生の一大決心は、時に影を潜めることがあったとはいえ、決して揺るがなかった。それはバッソ・オスティナート²のようなもので、後に私が対位法の勉強で学んだように、時に他の声部に交じて目立たない位置に移り、無知な者の目には消えてしまったように見えるだけなのだ。私の父が快く自分を外遊させてくれるはずがないことは、経済的理由だけを考えても明らかであった。もうすでに嫁いでしまい、将来の心配をしてやらなくてもよい娘に小遣いを与えるということと、未婚の娘の不毛な気まぐれに資金を出してやることは全く別だということも、私にはよくわかっていた。想像の裡で父は、疑いなく、尾羽打ち枯らして自分の手元に戻ってきて、結婚させようにも年を取りすぎているという私の未来の姿を見ていたのである。一方、父の収入も、家庭を維持してなお有り余るというほどではなかった。

12歳だった私にクラシック音楽を演奏してくれたあの家庭教師の到来が、私の人生の最初の里程標だった。突然、何も劇的なことなど期待していなかったときに、第二の里程標が姿を現した。なんと興奮することにも、「黄金のエルサレム」の作曲者、陸軍専務部隊のユーイング氏³なる人物が、オールダショット⁴の配属になったというのだ！音楽的要素のかけらも持ち合わせない私の父でさえ、そのニュースを聞いて感銘を受けたようだった。というのも、『古今聖歌集』の枠に囚われつつも、ある種のためらいがちな法悦を感じさせるその讃美歌は、教会での礼拝において、特祷⁵と同じくらい不可欠

『コミュニカーレ』8 (2019) 79-98

©2012 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

な存在となっていたからである。私はといえば、これでとうとう、あの A. S. 氏のようなお粗末な三文楽士ではなく、本物の音楽家に会えるのだと信じて疑わなかった。それは正しかったし、おまけにユーイング氏は、世にも稀なほど楽しく、独創的で、風変わりな人物であるとわかった。

ユーイング夫人と私の母は、会ったとたんに惹かれあい、最後には大の親友となった。同時に夫人は彼女を慕う家族全員を受け入れ、自分を「ジュディ小母さん」と呼ぶようにと命じ、私たちに向けてとても愉快的な手紙を書ってくれた。彼女の輝かしさは自分の身体の不具合を楽しむ傾向によって少しばかり曇らされた。彼女は実際に、頑健な体質ではなかったのだと思う。しかし彼女の父親が言ったと、娘婿が証言したところによれば、「可愛いジュリアーナはいつも『ありがたいことにちょっとまし』だが、決して『すごく元気』ではない」のであった。私は夫人から母にあてたチャーミングな手紙の束を見つけたが、想像もつかないほど美しい筆跡で書かれたその文面は、痛む腰や、ひどい頭痛や、空気枕を貸してもらったことや、旅行から戻るたびに何時間ソファで過ごしたかということにひっきりなしに言及しているために、半分損なわれているのだった。

彼女は異性に、とりわけ、当時英国陸軍の中でも選りすぐりの頭脳の持ち主を集めたと言われていた陸軍工兵隊の士官に入れあげていて、一度に二人か三人の士官を相手に、慎重な、ちょっと知的で、まったく罪のない恋愛遊戯を楽しんでいた。私にはそれが良いことだとはちっとも思えなかった——おそらくそれは嫉妬からだったのだろう、なぜなら言うまでもなく、彼女は会ってすぐさま、私にとって一番の「愛しい人」となったからだ。彼女の夫はといえば、もちろん私の演奏を聴きたがり、作った曲を見せて欲しいと言った。そののち彼は、私たちの小さな世界に向かって、私が生まれながらの音楽家であり、すぐに教育をうけるべきだと高らかに宣言したのだった。

私の父は怒り心頭に発していた。もともと、生粋の英国人タイプに合致しない人をすべからく嫌うたちであった父は、私の新しい友人を個人的に嫌っていた。また、ライブツィヒ遊学の考えが、音楽のわかる人物によって熱心に後押しされるだろうということも予見したのだった。ユーイング氏が、手始めに、自分がお嬢さんに和声を教えて進ぜましよう提案した時に、父の

憤懣は限界に達した。だがここで、夫の判断に全幅の信頼を置くジュディ小母さんに説き伏せられ、私の母が敢然と私の味方についてくれた。そうして、週に二回、私がオールダショットへ赴き、練習の進捗ぶりを見てもらうという取り決めがなされたのだった。

この遠征は私の生活の中の楽しみだった。当時陸軍の駐留地は、大きな兵舎以外はすべて木造の仮宿舎からなっており、ユーイング夫妻もそうした木造の家の一つに住んでいた。それは夏には息詰まるほど蒸し暑く、冬は厳しく冷え込むが、大変味のある建物だった。中には庭付きの家もあって、ユーイング夫妻の住まいもこのタイプであり、二人とも庭作りと犬が好きだったので、これは好都合であった。私はいつもフリムハーストから、夫人のために彼女が一番好きな花を摘んで、花束にしたものを持っていき、これで常に夫人の心をがっちりつかむことができた。

私はいつも 11 時に着いて昼食の時間まで和声のレッスンを受けた。それに加えて、先生は私の作った曲にも目を通してくれ、私は彼がいかに重要なことを、いかに的確な表現で指摘してくれるかに感じ入った。ユーイング氏の本来の楽器はオルガンだったが、ピアノ演奏には不向きな指で鍵盤をガンガンたたきつつ、耳障りでかすれた声で吠えるように『ローエングリン』や『さまよえるオランダ人』の楽譜をさらい、それが私にとって、ワーグナーの音楽との出会いとなった。私は当時、ワーグナーや他の誰よりも、ベートーベンが好きだったことをはっきりと覚えている。にもかかわらず、オペラという芸術表現は私の心に強烈な印象を残し、40 歳になるまでに自作のオペラがドイツで演奏されることこそ、自分の「最大の望み」だと心に決めた。この音楽の好みは、後年ライブツィヒでは一時的に押さえつけられるのだけけれど、私の野望が実現することは、運命によって定められていたのである。ユーイング氏がくれたベルリオーズのオーケストラ譜のコピーを私は今でも所有しており、実際にこれを使って一人で勉強した。この楽譜には、贈り主による、彼独特の注意書きや感嘆詞がいっぱい書き込まれていて、そのスタイルを読むこと自体が楽しく、今もしばしば手に取る本なのである。

昼食のあと、ユーイング夫人は親切にも、私が無名の教区冊子に書いた記事の文章を手直しし、批評をしてくれて、そのうちあなたを作家に育ててあ

げられるわ、と言ったものだった。だが私は、犬と遊んだり、夫妻が庭仕事をしている間におしゃべりをしたりすることの方が、もっと楽しかった。

一方、私の父の、「あの男」への嫌悪の念は、もはや狂信的といってよい域に達していた。父は温情あふれる人であるにもかかわらず、自分が好きでない人々に対しては極端に近寄りがたい態度で接する傾向があり、彼らの方を見やりながら実際にその顔を見ることはせず、口髭を持ち上げてかすかな唸り声を発するというその振る舞いは、故意に無礼を働くより始末が悪かった。一般市民であっても髪やネクタイや足元がだらしない人を見ると、父はイライラするたちだったが、…ましてやユーイング氏は軍人だったのだ！父がユーイング氏の軍服姿を一度も見なかったのは幸いだった、というのも、そんなことがどうしてできるのか不思議なくらいだが、私の友人は平服を来しているときよりも軍服を着ているときの方がよけいだらしなく見えたからだ。

しかし最悪だったのは、父がユーイング氏の道徳的性質を執拗に曲解することだった。赤鼻が消化不良によって引き起こされることが多いのを父も知っていたはずだが、ユーイング氏の場合それはスコッチ・ウィスキーのせいとされた。そして、何より我慢ならないことには、芸術家は「不道徳な輩」と信じ込んでいたので、私の指導者が私に向けた感情——それは暖かく強いものであったけれども、私に言い寄るといった要素はみじんもなかった——に、自分自身の勝手な解釈を付け加えたのだった。何も知らないジュディ小母さんから、自分の夫は催眠術が得意だと聞かされたことも事態を悪化させた。これはおそらく、妻の身体の不調をやわらげるためにのみ、身につけた技であろうと思うのだが、そんな特技を持っている男性が、感じやすい娘を持つ父親の目にどう映ったかは、想像するに難くない。芸術家の魂においてどんなことが起こっているかなど、知る由もなかった父には、私と氏の連帯の強さを理解するための満足な手がかりもなかった。また、後年になってそれと気づくことが一、二度あったのだが、自分では私の心を変えることのできなかった父は、私が自分以外の男の感化を受けることが気に入らなかったのだ。要するに、父のジュディ小母さんへの敬愛の念と、彼女が常に発揮する機転と魅力だけが、全面的な破局をかるうじて防いでいたのである。

だが、破局はついに訪れた。私には昔から、部屋に私信を置きっぱなしに

する悪い癖があり、父には、母の言によれば、「人の書き物机の周りを嗅ぎまわる」習性という愛すべき欠点があった。そのような折に父はユーイング氏からのある手紙を見つけた——他愛のない内容だったが、親や保護者が読んで楽しいものではなかった！その結果、猛烈な嵐が起こった。ユーイング夫妻にオールダショット離任の命令が下っていたので、早晚終わるはずだった和声のレッスンは、このために唐突に打ち切られてしまった。

(中略)⁶

この冒険⁷が終わって間もなく、ユーイング夫妻もオールダショットを去ってしまった後に、私は社交界デビューをした。だが当時私がどんな心持ちでいたか、まったく思い出すことができない。私は自分が一人前にならぬうちに、自分の音楽の計画を実行に移そうとは夢にも思っていなかったし——それはあまりに無分別なことだった——、特に急ぐ必要があるとも思われなかった。だからおそらく、本物の舞踏会や他の楽しい催しに加われる年齢に達したのだから、そうした世界を見てみるのも一興かと思ったのだろう。

総じてその世界は、私にとって期待外れだった。今でもそうだが、私は昔から、会食という、最も健全な娯楽が大好きだった。単に食いしん坊だからとか、何が供されるか興味津々だからというだけではなく、若者と年配者の交流、おしゃべりや笑い、楽しい飲み食いのおかげで徐々に温まってくる場の雰囲気、などが好きだったのである。食事の後にはすぐに、歌ってくれと頼まれるのが常で、私は他の誰もピアノに近づけないようにしたので、ひどい音楽の拷問にあう心配もなかった。

だが舞踏会は！…おお、あの窮屈な白いサテンの胴着を着て長時間馬車に揺られることや、じっと座ってスカートをしわくちゃんにしないようにと懇願されることの苦痛！だが最もつらい試練は踊ることそのものだった。私は特に音楽が気に入った時には、「今死ねたらそれでもいい」とばかり、無我夢中、情熱的に踊ることは好きだった。だが、何と残念なことか、10人中9人のパートナーはテンポの感覚を持っていなかった。さらに悪いことに、その9人が9人とも、拍より早いことは決してなく、常に拍より遅れるのだった。そしてよく聞かされた、気取った、嘘っぱちの、まったく馬鹿げたセリフ——「私

はいつも、半分の遅いテンポで踊るんです」(！)。今ではそんな言い回しが舞踏会場で流行っていないことを願うばかりである。時折私は、小柄で体重の軽そうなパートナーの襟首を、いわばふんづかまえ、進むべき方向に彼らを引きずり回したのだが、相手はそれを楽しんでいないことに気づくのだった。私自身はこれらの気の毒な人たちに、私と踊ることを楽しんでほしいと思っていたのだから、おかしいものだ。

舞踏会の困った点はこれだけではなかった。私が舞踏会に行くのは踊るため、他になんの理由もなかったのだが、ほどなく私は、それは舞踏会の理論としては大変不完全だということを知った。自立心があり、踊るとき以外には人にしがみつくこともしがみつかれることも欲さない私のような人間が、結婚に通じる控えの間と言うべき舞踏会場で、いったい何をしていたのか？ 昔からの問題がまた頭をもたげ、私は、自分の属する世界と自分の間にある溝は決して埋まらないこと、自分は羊の皮をかぶった狼、つまりはにせ者だということを思い知らされたのだった。恋愛遊戯をする才能は私にはなかった。それにはまったく別の気質が必要で、情熱的というより、浮ついているか好色であることが求められるのだ。私の恋愛への試みは、素人っぽくて身がはいっておらず、男子生徒相手の子供っぽい恋愛ごっこのようなものにならなかった。さらに侮辱的で頭にくるのは、もし私がある男性に「親切に」接したら、私が彼と結婚したがっていると受け止められるのが当たり前、ということだった！ このように、欠陥だらけではあったが、私は当時若くて見た目も悪くなかったので、一つか二つのちょっとした戯れの恋があるにはあった。というより、そこここに私の崇拜者がいた、という方が正しい。それらの男性を、私は「求婚者リスト」を作るつもりでその気にさせたのだと思う。しかし、それ以上には、何もたいしたことは起こらなかった。

こうした社交にまつわる混乱があったけれども——というのもそれらを私は楽しみと呼ぶ気にならないので——、音楽はいくぶん断続的に、前進を続けていった。ある日私はユーイング夫妻と共にワーグナーのコンサートに行き、ユーイング夫人の弟で大変成功している歌曲の作曲者、アルフレッド・スコット・ガッティ⁸に引き合わされた。ガッティは、義兄の舞い上がりやすい気性をよく知っていたので、私に決して「高きを望む」ことはしないで

くれと懇願した。「そんなことしたってなんの役にも立たないんだから」と彼は付け加え、私は彼が本気で言っているのだなと思った。当時英国ではほとんど知られていなかったワーグナーは、自分で指揮をしていくつかの演奏会を行う契約を性急に結んでしまっていた。後で聞いたところではこれらの演奏会は財政的には失敗だったようだ。我々の一行は皆お金がなく、舞台から遠く離れた席に座ったので、私が目にすることができたのは、巨大な頭を持つ並みより小さな男が、演奏会の初めから終わりまで、強烈な憤怒の情に駆られている様子だということだけだった。私は彼が、指揮台だけでは足りず、片っ端から演奏者の頭を打ち据えずにはおれないのかと思ったほどだ。演奏は明らかに稽古不足で、ひどくまずかったし、とにかく私は期待したほど感動できなかった。

時たま、ほんの限られた機会だけだったが、私はロンドンの演奏会にも出かけた。そんな折には、信頼できる友人か、スーザン叔母さんのメイドとウォーターloo 駅で落ち合い、セント・ジュームズ・ホールまで付き添われていくのが決まりであった。そうした演奏会のある時に、私はなんと、シューマン夫人⁹ その人と、その娘たちに引き合わせてもらえた。この素晴らしい出来事のお膳立てをしてくれたのは、私の友人、ジョージ・シュワープ夫人で、この友については後程さらに述べる。彼女の義理の母——この人物にも、この手記の中で再び登場してもらうことになる——が、シューマン夫人の古い友人だったのである。信じられないことだが、後年にこの類まれな女性から受け取った様々な印象があまりにも豊かすぎたためか、我々の最初の出会いの記憶が跡形もなく消え去ってしまい、何も残っていない。だがユーイング氏からの手紙の一つに書いてあったことから察するに、シューマン夫人は私の音楽への抱負を聞いて、頑張ってねと励ましてくれたらしい。まさにそれしか言いようがなかったであろう！

それから間もなく、私は自分の音楽修行の道程の中で、先の二つの里程碑の次に重要なものと言っている、もう一つの画期的な出来事を経験した。生まれて初めてブラームスを聴いたのだ。土曜ポピュラーコンサートという音楽会で、『ワルツ集「愛の歌」』が四人の歌手によって演奏された。その四人とはフリートレンダー嬢¹⁰、レデカー嬢¹¹、シェークスピア氏¹²、そしてジョー

ジ・ヘンシェル¹³で、そのうち三人のドイツ人は作曲者を個人的によく知っており、後に私の人生の鍵を握ることになる人物であった。この日、私はブラームスの全容を見た。ブラームスのもっと大きな作品、知ったかぶりの人に言わせればより重要な作品が、これ以降も、私の心に新たな感動の炎を燃やすことになる。だが彼の才能は、この時この場で、たちどころに私を捉えたのだった。私は明確な決意を胸に秘めて、帰途についた…。

その晩、夕食の席で、私がどのお屋敷のパーティに出席すれば、一番よいお目見えになるだろうという議論が起こった。突然私は、自分をお目見えさせようとしても無駄なことだ、なぜなら自分はライブツィヒに行くつもりだし、たとえ家を飛び出して彼の地で飢えて死ぬことになろうとも決心は変わらないと宣言した…。

世の中があまりにも急速に変わってしまったので、当時そのような行為が、私の父の目にはどう映ったかということ、現代の読者に理解してもらうことは到底できないだろうと思う。私たちの家族に、芸術家の知り合いは一人もいなかったし、父にとってその言葉は、努めて十戒を破ろうとする人々を意味した。私が送りたいと言った生活は、父には、街の女になるのと同じに見えたといっても過言ではない。父が怒りに任せて私に投げつけた言葉が、ウェブスターかコングリーブの芝居に出てくる、逆上する父親のセリフを思わせるものだったのは当然であった——「死んだお前を見るほうがましだ」。

父の反対を克服しようと、相当の期間努力を重ねたがらちが明かず、あまりに激高するのでその話題を持ち出すことさえできないという状態が続いた挙句、私は策をめぐらし、後世の女性が政治的闘争の中で使うことになった手段をとることにした。その女性たちも、男性の偏見の根深さを、とことんまで味わい尽くした末に、勝利を得る方法はこれしかないと考えてに至ったのだ。私は革命の赤旗を掲げ続けただけでなく、家庭での生活を耐え難いものにして、家族が私に出て行ってほしいと思うほどにしようと決心した。（「家族が」といったが、私はここでもまた、表向きはどう言っても、私の母はひそかに私の側についていると感じていた。）当時、きちんとした家の娘は一人で外出などしなかったし、三等車や乗り合いバスなどは、私たちの世界の住人とは無縁のものだった。そして私にはお金もなかった。だが私は家

を抜け出してファーンバラ駅まで原っぱを越えて行き、三等車でロンドンへ着くと、バスに乗って自分の行きたいコンサートを聴きに行った。金銭の問題は、ザ・グリーンで取引していた出入り商人や郵便配達人から5シリングを借り、すべて「將軍のつけにしておく」ことで対処した。ヨアヒム¹⁴や彼の仲間たちの近くに行けるように、私は何時間もセント・ジェームズ・ホールの入り口の列に並んだものだ。そしてああ！シューベルトのイ短調の四重奏を聴いたときに受けた啓示よ！…これまでの人生で、シューベルトの音楽ほど私の心に親しく訴えかけるものはなかった——あの、永遠に尽きることなく湧き出す水晶のように澄んだ流れ…。

自分の座った席から、ジョージ・エリオットと彼女の夫（ジョージ・ヘンリー・ルイス）が、二羽の老いたオンドリ夫婦さながらに、ストール席に並んで座っているのをよく見かけたのだが、ルイスには自分の鼻眼鏡で彼女の腕を叩いて拍子をとるという癖があって、見ているとイライラさせられた。ベートーベンの四重奏 作品132の中に、有名なシンコペーションのパッセージがある。その眼鏡が、一瞬ためらったのちに、間違った拍子を取り始め、再びわからなくなって宙に浮き、しばらくしてから、何事もなかったかのように威張りかえって正しい拍子を打ち始めるさまを、私は大いに馬鹿にしつつ、面白がって観察した。ジョージ・エリオットはそのすべてを泰然として受け止めていたが、それはあたかも彼女がスフィンクスで、ルイスはその大きな横腹からハエを追ひ払っているアラブ人であるかのようにだった。

最も興奮した出来事と言えば、早鐘のように心臓をばくばく言わせながら、チャペル氏¹⁵という恐ろしい番犬の横をすり抜けて演奏者の控室に侵入した日のことだろう。その部屋こそは私にとって、若きレビ人にとっての至聖所もかくやというべき、最も神聖で畏れ多い場所であった。そこで私はフリートレンダー嬢とレデカー嬢の知己を得、二人の歌を私がどれほど称賛しているかを述べ、そしてレデカー嬢に熱烈な恋をした。あの偉大な愛の歌、「僕の女王様、あなたはなんと」を彼女が歌うのを聴いて、私は自分の身体から心臓が抜き取られる思いがしたのだった。二人は気立ての良い人たちで、このような私の熱狂ぶりにほだされ、いつか午前中に訪ねてきてくださいと言ってくれた。もちろん私はその言葉に従い、二人が共有している部屋へ、

階段をいくつも登って行った。それは午前 11 時だったが、彼女たちは部屋着をまとい、ベッドはまだ寝乱れたままで、二人とも卵立てに入れたポルト酒をちびちびと飲んでいた。この見慣れない情景に私はいくぶんショックを受け、一瞬父のことを考えたが、おそらくこれは芸術家の生活のごく一部に過ぎないのだろうと考えた。そして実際、2、3 ヶ月もたつと、ジョージ・エリオットにとってのルイス氏の眼鏡と同様、私はこのような光景を見ても全く動じなくなった。

私が取引先の商人と交わしていた金銭の取り決めは、当然家族の知るところとなった。私は初めからそのつもりでおり、いきり立つ父に対して頑固にこう言い返した、「お父様が私をライブツィヒに行かせてくださらないのだから、私がロンドンに音楽を聴きに行かなければならないのは当たり前でしょう」。この瞬間から父は、放っておいたら私が手あたり次第に金を使い果たすだろうと確信したようで、「そのうちお前の母さんのダイヤモンドを売る羽目になるだろうよ」というのが父のお決まりのセリフとなった。それは私たちにとっては、貨幣切り下げのような非常手段と肩を並べるほどの、悲惨な事態という響きを持っていた。しかしこのセリフの中に、私は意思の弱まりを見たように思った。彼は実際に、降参したらどのようなことが起こるかを考え始めていたのだ！…

私には、半ば公然と私の決意を応援してくれる友人が数人いて、その人たちは当然、我が家では不評を買っていた。この原則の唯一の例外は、現在はアーンリー卿夫人であるバーバラ・ハムリーであった。彼女は魔法としか思えないやり方で、私の友達でありながら私の両親とも大変うまくいくという離れ業をやったのけ、両親は彼女が大好きだった。彼女がこの奇跡を起こし得たのは、如才のなさ、思慮分別とユーモアのセンスとがうまく混じりあったその資質のおかげだったが、これは彼女の人生において、たくさんの扉の鍵を開きやすくすることに役立ってきたに違いない。しかも、このフリムハーストの反逆児への共感を別にすれば、彼女は完璧にまともで、模範的な若きレディで、当時幕僚大学校長であったサー・エドワード・ハムリーの家を立派に切り盛りしていた。サー・ハムリーは彼女の伯父で、彼女は伯父を敬愛し、伯父も彼女を心底大事にするという間柄であった（そしてこの人物の

共感すべき特徴の一つは、私の母への強い称賛の念だった)。こんなわけで、彼女は作戦行動を行うには大変有利な状況にあった。そして彼女が私を擁護してくれたことには一つの有益な因子が含まれていた。彼女は私の父の視点を完璧に理解できたからである。

ジョージ・シュワープ夫人の擁護の場合は、そうはいかなかった。彼女は控訴院裁判官ジェームズ卿の娘で、頭がよく、乗馬好きで、ホイストを好む、私の特別大事な友達であった。急進的で、非正統的な宗教観を持っていると思われても仕方のない人だった彼女は、当然のこと、私のドイツ留学計画への反対を、馬鹿げていて時代遅れだとみなした。ネーピア夫人も同じ考えだった。夫であるウィリアム・ネーピア將軍（歴史家の息子）とは従兄妹同士の間柄、夫は当時サンドハースト王立陸軍士官学校の校長であったが、実際にサンドハーストを仕切っていたのは彼女だった。このとても愉快的私の擁護者の裡にも、反逆者の血が流れていた。彼女の父、猛々しいワシの目をしたサー・チャールズ・ネーピアは、娘と瓜二つだったが、ギリシア人だった妻と駆け落ちしたのである。この二人の私の友人が、私の家庭における絶え間ない争いの種であったことは言うまでもない。そしてとても嫉妬深い性格である私の母が、この二人にとりわけ敵愾心を燃やしたとしても、何の不思議があるか？ネーピア夫人がとてつもなくかわず、「そりゃもちろん、可愛いエセルはライプツィヒに行くべきですわ」と言うのは、結構だろう。親に面と向かって言うのだって結構だろう——実際に、恐れを知らない一族の出だったから、夫人はそうした。だってあの人は母親ではないのだから、あの人はお父様との毎日の争いに耐える必要はないのだから。——こんな愁嘆場は、日を追って激しくなり、頻度も増していった。というのも最後の頃には私は完全なストライキ状態に入り、教会に行くのも拒み、ディナー・パーティの席で歌うことも拒み、馬車の遠出に行くことも拒み、誰と話すのも拒んだのだ。ある日など、父のブーツが私の締め切った寝室のドアの羽目板をもう少しで蹴破るところだった！…

こうなったらもう降参するしかなかった！奇跡的にも、フリートレンダー嬢が彼女の叔母、ハイムバッハ教授夫人の人品骨柄を保証してくれた。叔母はライプツィヒ在住で、フリートレンダー嬢の実母が私の住む部屋を都合で

きようになるまでの間、きっと私を預かってくれるだろう、と言ってくれたのだ。そこで提示された条件は、メアリー・シュワープの、ドイツでの生活費は高くないという報告を裏付けるものだった。父は私のために出せる遊学のための費用の最大額を口にした。それは気をつけて使えば、十分足りると断言された。そしてとうとう、1877年7月26日に、ドイツ語がよくできるハリー・デイヴィッドソン¹⁶に付き添われて、私は7年もの間夢に見た憧れの地へと送り出された。仮の許しを得ただけで、この上なく親の不興を買ったの出立だったが、うれしすぎて、そんなことは気にもならなかった。

謝辞

この翻訳を試みるにあたって、貴重な助言をくださった同志社大学 David Chandler 教授、ならびに Smyth の発音について貴重な情報を提供してくださった同志社大学吉田優子教授に、お礼を申し上げます。

訳注

- 1 「音楽の胎動」のセクションは、1867年から1877年までをカバーしており、本稿で訳出した部分はこのセクションの最後の4分の1にあたる。この前の省略した箇所では、スマイス一家がフリムハーストに引っ越してからのおち、筆者エセル・スマイスが家庭と学校で受けた教育、12歳の時に家庭教師により音楽に目覚めたこと、姉二人の結婚と兄との死別などが語られている。詳しくは解説を参照。
- 2 固執低音。ある一定の音型を同一声部で何度も繰り返す手法で、特に低声部に置かれたものをこう呼ぶ。
- 3 Alexander Ewing (1830-1895)。スコットランド生まれ、軍人にして音楽家。「黄金のエルサレム」(1853)の作曲者として有名。妻 Juliana Horatia Ewing (1841-1885) は子供向けのお話の作者として名を知られた。
- 4 英国ハンプシャー、オールダショットにある陸軍駐屯地を指す。スマイスの父は、退役までこの駐屯地の指揮を任されており、一家はここから遠くないフリムリーという村の、フリムハーストと呼ばれる家に居住していた。
- 5 原語は Collect、特祷または集祷。英国国教会(聖公会)の礼拝において、人々の祈りを集めたものとして、必ず捧げられる祈祷のこと。
- 6 訳者による中略。こののち、数段落にわたって筆者エセル・スマイスがアイ

ルランドに旅行した際、知り合った男性、ウィリアム・ワイルドと意気投合し、秘密裏に婚約までしたというエピソードが語られる。この一夜にしまった婚約は、筆者によってその後撤回された。本稿では紙幅の都合により割愛する。

- 7 訳注 5 に述べた、ワイルド氏との婚約の顛末を指す。
- 8 Alfred Scott-Gatty (1847-1918)。イギリス生まれ、紋章官であったがたくさんの歌曲の作曲をしたことで知られる。
- 9 Clara Schumann (1819-1896)。ドイツの著名なピアニスト、音楽家でロベルト・シューマンの未亡人。
- 10 Thekla Friedländer (1849-1898)。ドイツの歌手。
- 11 Augusta Redeker。ドイツの歌手。
- 12 William Shakespeare (1849-1931)。イギリスのテナー歌手、教育者、作曲家。
- 13 Sir Isidor George Henschel (1850-1934)。ドイツ生まれの英国のバリトン歌手。ピアニスト、作曲家、指揮者としても活躍した。
- 14 Joseph Joachim (1831-1907)。ハンガリー生まれの著名なヴァイオリニスト、指揮者、作曲家。
- 15 おそらく Samuel Arthur Chappell、楽譜出版社 Chappell & Co. の経営者一族の一人。Chappell 社は同じく楽譜出版社の Cramer & Co. と共にセント・ジェームズ・ホールを創立した。Samuel Arthur Chappell は土曜日と月曜日のポップ・コンサート（主にクラシック音楽の室内楽を演奏する音楽会）のマネージャーを務めていた。
- 16 筆者の長姉、アリスの夫。

解説

本稿は、エセル・スマイスⁱ (Ethel Smyth, 1858-1944) の自伝選集、*The Memoirs of Ethel Smyth* (Abridged and Introduced by Ronald Crichton, 2008, Faber & Faber) のうち、49 ページから 59 ページの翻訳である。この選集の中で、今回訳出した部分は、1919 年に二巻本で出版されたスマイスの最初の自伝、*Impressions That Remained: Memoirs of Ethel Smyth* (1919) から取られており、その中の“Chapter XII, 1875 and 1876”と“Chapter XIII, 1876 and 1877”の二章にあたる。Ronald Crichton は、この二章をほぼそのまま選集に採録しているが、一部は省略されている。

スマイスは、職業作曲家として名をなした最初の英国女性と見なされてお

り、*The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (1995) では、長く英国楽壇から正当な評価を受けてこなかったが、20 世紀初頭の、「英国の音楽界の要人における重要な声」(591) だと評されている。また、文筆家としても名をなし、最初の自伝に続いて、次々と自伝的書物や随想、評伝を執筆し、全部で 10 冊の書物を上梓した。その中でも、最初の自伝 *Impressions That Remained* は大成功をおさめ、執筆家としての彼女の名声を一気に高めた本である。

スマイスは 1858 年 4 月 22 日に、現在はケント州のシドカップで生を享けた。父は軍人、上流中産階級に属する家庭で、エセルは 6 人の娘と 2 人の息子の中の第 4 子であった。1867 年に父がハンブシャー、オールダショットの陸軍基地の指揮を任されたのを機に、一家は同州ファーンバラから遠くない、サリー州の西端に位置するフリムリーという村の、フリムハーストと呼ぶ地に居を定めた。スマイスはこのフリムハーストの家に、ヨーロッパ遊学から帰国後も父親と共に住み、父親の死後は同じ地域の One Oak というコテージに、その後はサリー州ウォーキングに近いコインという地に暮らし、1844 年 5 月 8 日に 86 歳で死去した。一生独身であったが、その生涯は、多くの友人との熱烈な交流に彩られた、ドラマティックなものであった。その友情と愛情を捧げた相手は、唯一の男性パートナーであり親しい友人であったハリー（ヘンリー）・ブリュースター（Henry Brewster）を除き、すべて女性で、その中には 1919 年に知り合った作家イーディス・ソマーヴィル（Edith Somerville）、1930 年に親しくなったヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）なども含まれている。

エセルは子供時代、格別の音楽教育を受けたわけではなかったが、幼いころから耳は良かったと自伝で回顧している。12 歳の時、ライブツィヒ音楽院を卒業した家庭教師が演奏したクラシック音楽を聴いて、自分も音楽家になることを志し、家族の反対を押し切って 1877 年に 19 歳でライブツィヒに渡る。ライブツィヒでは、音楽院に入学するも、そこでの授業に失望し、ライブツィヒ在住の音楽家ヘルツォーゲンベルク（Heinrich von Herzogenberg）に和声や対位法の教授を受けることになる。ブラームス、クララ・シューマン、グリークといった著名な音楽家と知り合い、ヘルツォーゲンベルク夫妻

や本稿でも名前のあがるヘンシェル、フリートレンダーらをはじめとするさまざまな音楽家、音楽愛好家の友情と助力を得て、ヨーロッパ大陸での遊学は10年余に及んだ。1890年に帰国した後も、英国とヨーロッパを行き来し、作曲と演奏（あるいはそのための交渉）活動を行い、また旅行（その行先はヨーロッパ以外にも及んだ）やスポーツなどにもいそしみ、晩年は執筆活動と、その精力は衰えることがなかった。

スマイスの主要なジャンルはオペラで、6曲をものしているが、その他にミサ曲、声楽曲、室内楽曲、オルガン曲等を残している。1890年の英国帰国以降、1910年代までは、作曲家スマイスにとって闘いの時期であった。1891年に最初の大作『ミサ 二長調』(*Mass in D*、1893 ロンドン初演)を作曲、その後、オペラ『ファンタジオ』(*Fantasio*、1898 ワイマール初演)、『森』(*Der Wald*、1902 ベルリン初演)を完成、1902年から1904年にかけて最大の傑作と言われるオペラ『難破船略奪者』(*The Wreckers*、1906 ライプツィヒ初演)を書く。しかし、彼女はこれらの作品を演奏させるために、友人たちのコネを使い、またヨーロッパ各地を訪れて指揮者やマネージャーに掛け合うなど、文字通り駆けずり廻らねばならなかった。一つには、当時の英国では、ドイツやイタリアの音楽が尊ばれ、自国の作曲家のオペラがほとんど演奏されなかったという事情がある。英国作曲家は、まずはヨーロッパで認められ、その後本国へ凱旋という道筋をたどらねばならなかったのだが、女性であるがゆえに認められなかったという思いも、スマイスには強くあったに違いない。

1910年にスマイスはエメリン・パンクハーストに出会ってその思想に共鳴し、二年間サフラジェットとして過激な活動を行って勇名を馳せる。その後再び作曲活動に戻り、『甲板長の仲間』(*The Boatswain's Mate*、1916 ロンドン初演)を書き、この作品と『難破船略奪者』のドイツでの演奏を企てるが、第一次世界大戦勃発でその夢は潰えてしまう。戦争中、スマイスはフランスでレントゲン技師として作業奉仕を行うが、その間に聴力の異常に気付く。この時期に書き始めた自伝が、1919年の二巻本に結実するわけであるが、この著作には子供時代から1890年あたりまでの出来事が記述されている。

1920年代になると、スマイスの名声が高まって、作品が演奏される機会も増え、1922年にはその活動を称えてDBEの称号を授与され、またダラム大学（1910）とオックスフォード大学（1926）から名誉音楽博士号も贈られる。その間も彼女の聴力は衰え続け、1920年代に二つのオペラ（それぞれ1923、1925）、ヴァイオリンとチェロのための協奏曲（1926）等作曲の後、カンタータ『牢獄』（*The Prison*, 1930）が最後の作品となった。彼女の軸足は執筆活動に移り、1921年から1940年までに計9冊を出版する。晩年のスマイスは初の女性音楽家として闘ってきた老兵であり、文筆家として、そしてその強烈なキャラクターによって知られる人物となっていた。

作曲家としてのスマイスの評価は、近年まであまり高かったとは言えない。後年に作品が演奏される機会も多くなり、栄誉に浴したとはいえ、スマイス自身が望むようなオペラの本格的な上演は決して多くはなく、彼女の死後はほとんど再演されることがなかった。英国初の女性職業作曲家としての意義は認めても、執筆家としての方が優れているのではないか、また自伝に書かれた本人の生きざまの方が面白い、といった見方が、英国では長く続いたのである。スマイスの音楽作品の再評価が始まったのは20世紀の終わり近くであり、1990年代以降、かなりの作品がCD化され、大作『難破船略奪者』の再演も1994年に行われた。現在、英国に拠点を置く団体Retrospect Operaにより、さらに数曲のオペラの演奏、録音とCD化が進められているⁱⁱ。また日本でも、スマイスの音楽が紹介、演奏され始めている。

だが、日本においては、音楽家として、文筆家としてのスマイスが十分に知られているとはいえない。現在、スマイスの伝記は、Christopher St. John（1959）とLouise Collis（1984）の二冊があり、また数冊の自伝的作品が残されているわけだが、日本では、最初の自伝*Impressions That Remained*のうち、ライブツィヒ遊学中に出会ったブラームスの思い出をつづった部分が翻訳されているのみであるⁱⁱⁱ。まず、その自伝は、あまりにも大部であり、また10冊の著作の中に重複も多い。その文体は、『ブラームスの思い出』の編者が述べている通り、大変奔放で大胆、現代の平易な英文に慣れている読者には大変に読みづらい。二冊の伝記は、コンパクトではあるが、St. Johnの著作は古く、Collisの本にも決定版という評価が下されては

いない。

しかしながら、そのためにスマイスの全貌が紹介されないことは、大変残念である。まず、彼女の自伝がベストセラーになった、それだけの魅力と価値をもった書物であったことを忘れてはならない。現代の読者には読みなれないとはいえ、スマイスの文章は自由闊達、大変な筆力をもった作家であることは間違いない。また、19世紀後半から20世紀前半にかけて、英国とヨーロッパの各地でさまざまな音楽と事物に出会い、数々の著名な人物と親交を持ったスマイスのメモワールは、この時期のヨーロッパ世界の一側面を生き生きと描き出し、彼女にしかできない角度から切り取った人物評などにあふれていて、興味が尽きない。今回、その一部を訳出してみたいと考えた所以である。

最初に述べたように、この翻訳には Ronald Crichton が編纂した自伝選集を使用した。Crichton は、スマイスの数冊の自伝的書物を横断して、そこから抜き出した部分を時系列に沿って並べ、一冊の書物に収めている。本稿で訳出した部分は、ほぼそのまま、*Impressions That Remained* に収録されているものである。しかし、この自伝には各章の終わりごとに書簡集が収められ、細かい逸話がさらに加わっているため、興味深いとはいえ、すべてを訳出することは煩雑を極めると判断し、Crichton の縮約版を使用することにした。Crichton は、複数の本から抽出した部分をつなぎ合わせる際に、各書物からの抽出部分の出典を巻末の注に示しているのみで、必要な書き換えを行った際にも、本文中でことわってはいない。したがって、本稿中にみられる三つの点は、Crichton が挿入した省略記号ではなく、スマイスの原著に見られるもので、Crichton の言葉を借りれば、スマイスが同時代の作家と共有した「癖」である (Crichton 17)。

本稿で訳出したのは、Crichton の縮約版の第一部、1858-1877 年の部分のうち、最後のセクション、“Musical Stirrings”の一部である（このセクションの表題は Crichton のもの）。このセクション自体は、1867 年から 1877 年、エセルのライブツィヒへの出立までの期間を扱っている。1867 年に一家がフリムハーストに移るところから始まり、最初は家庭教師により、後にはロンドン郊外の寄宿学校に送られて、教育を受けたこと、12 歳の時にライブ

ツイヒで音楽を学んだ家庭教師がやってきたことにより、音楽家になる夢を抱いたことが述べられる。1872年に父は退役、1875年に二人の姉が嫁ぎ、兄が早世して、エセルが一家のきょうだいの年長者となる。訳出したのは、その後に続く、1875年から1877年にかけての出来事を扱った箇所、スマイスは16歳から19歳。彼女が12歳の時に胸に宿した音楽へのあこがれを捨てず、軍人で作曲家であったユーイングの教えを受け、父の反対を押し切ってライブツイヒに旅立つまでを描いている。英国の田舎に住んでいた数年間だが、盛りだくさんの人物と出来事が登場し、エセルの筆のはしりも相まって、飽きさせない。また、エセルの音楽への思いがストレートに綴られており、彼女の人となりをよく表している。訳注に記した通り、この中で、エセルがアイルランド旅行中に知り合った男性と婚約し、その後破棄するエピソードは、興味深いものであるが、今回訳出しなかった。

訳注は、煩雑を避けるため、最小限にとどめた。まず、著名な作曲家や作品名には注をつけていない。テキストに登場する人物については、一度しか登場せず、重要でないと思われる人物には注を施していない。エセルの人生に重要な役割を果たすが、それほど著名でない人物、かつ、この訳出部分においてその出自や経歴が語られていない人物には簡単な注を施した。また、さほど重要でなくとも、説明がないと訳出部分の理解に支障があると思われる人物、事柄には、注を施している。

注

- i Smythをどう発音するかは英語話者の間でもしばしば問題となっていた。訳者の先の論考では、Smythは語尾のeがない場合もscytheと韻を踏むという考えに従い、日本語表記をスマイズとしていた。しかし、この問題に「決着をつける」として、Ethel Smythの場合、scytheではなくForsythと同じ語尾の発音であるということが確認されたという論考が発表されている(Moon 136)。本稿ではそれを受けて、スマイスと表記を改める。
スマイスの生涯と音楽作品については、拙稿(山本)でも述べており、内容が一部重複することをお断りしておく。
- ii 山本、また加藤(54)参照。
- iii 天崎参照。正確かつ歯切れのよい文体の名訳である。

引用参考文献

- Collis, Louise. *Impetuous Heart: The Story of Ethel Smyth*. William Kimber, 1984.
- Moon, Sarah H. *The Organ Music of Ethel Smyth: A Guide to Its History and Performance Practice*. Doctoral Thesis submitted to Indiana University, 2014.
- Smyth, Ethel. *Impressions That Remained: Memoirs of Ethel Smyth*. (1919). Alfred Knopf, 1923.
- . *The Memoirs of Ethel Smyth*. Abridged and Introduced by Ronald Crichton. Faber and Faber, 2008.
- Sadie, Stanley, ed. *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. Macmillan, 1995.
- St. John, Christopher. *Ethel Smyth: A Biography*. Longmans, 1959.
- エセル・スマイス「ブラームスと私」オイゲーニエ・シューマン他『ブラームスの思い出』(天崎浩二編・訳、関根裕子共訳)(音楽の友社)、2014。
- 加藤めぐみ「ブルームズベリー・グループと音楽文化《序》『ウルフと音楽』マッピング」『ヴァージニア・ウルフ研究』第33号、2016、47-60頁。
- 山本妙「ウルフが会った／出会わなかったスマイズとブリテン」『ヴァージニア・ウルフ研究』第33号、2016、61-78頁。

山 本 妙 訳

Ethel Smyth:
Excerpt from *The Memoirs of Ethel Smyth*

Tae YAMAMOTO

Keywords: Ethel Smyth, translation, memoirs